

⑦ 岡田三郎助、和田三造の外国出張

昭和十年十二月十八日、岡田三郎助と和田三造は「満洲國ニ於ケル古美術調査ヲ兼ネ美術教育ノ施設一般ヲ調査研究」することを目的に約十八日間の予定で満洲国出張を許可され、同年十二月二十日に出発し、翌十一年一月七日に帰国した。

⑧ 帝国美術院改革の影響

昭和十年の帝国美術院改革（松田改組）は、同院と密接な関係のある本校に大きな影響を及ぼし、和田英作校長の辞任という結果を招いただけでなく、同十九年に断行される本校改革の一因がここに胚胎した。

その概要を記せば、昭和十年二月八日、第六十七議会予算第二分



「波瀾の会員総会 今晚零時半の美校玄関」
昭和10年6月15日 紙名不明
〔「諸新聞切抜」より転載〕

科会の席上、政友会代議士大口喜六は文相松田源治に対して帝国美術院展覧会（帝展）の情弊、腐敗を指摘して改革を迫った。文相はこれに全く同感の意を表明し、直ちに文部省内で改革案の検討を始めたが、その協議に携わったのは文部省の添田敬一郎政務次官、三辺事務次官、赤間信義専門学務局長および正木直彦帝国美術院長、和田英作本校校長、川合玉堂同教授、矢代幸雄同教授兼美術研究所主事ら極く少数であったことが正木の『十三松堂日記』によって分かる。左記はその部分の抜き書きである。

〔昭和十年〕

三月二日……午前九時半文部大臣官邸に文部政務次官添田 事務次官三邊 専門学務局長赤間の三氏と會談 帝國美術院の改革に付き懇談あり……

三月四日……午後五時日本俱樂部に行きて文部政務 事務次官兩人赤間専門局長 和田美校長 川合玉堂と會合 帝展改組の事に就きて内議す……

三月七日……午後五時紀尾井町錦水にて牧野伯爵を迎へ和田 川合 赤間氏と共に會合 帝展改革に付き伯爵に成案を説明し着手に付き助力を乞ふ 快諾して相當の補助を惜しまずと挨拶されたり

三月十六日……正午より日本俱樂部に於て赤間専門局長 和田川合兩氏と會食し赤間氏に於て検討したる帝國美術院改革新官制に就いて研究したる成案を文相より閣議に提出して諒解を得たる後改革に着手する事としたり

四月二十一日……午前十一時に築地錦水に添田文部政務次官 赤

間専門局長 和田川合兩氏と會合 帝國美術院改革の準備工作に就いて協議す……

五月三日……午後四時より文相官邸に於て添田次官 赤間局長に會して帝展改革に關する其後の経過を聞取る

五月十一日……午後二時半文部大臣官邸に於て添田文部政務次官

赤間専門學務局長と會合し帝國美術院根本改革見通し付きたる

により余は此際退身する方改革の趣意徹底すへしと思ひ辭意を兩氏に通したり……

五月二十五日〔金沢に滞在中〕……今朝東京赤間専門學務局長より電話あり 帝展改革に付き豫て申合せたる通牧野内府に通し

たるに内府の諒承を得たること新會員候補者悉皆交渉承諾済なること來週火曜日に閣議に上議決定の事を申來る

五月二十八日……今日の夕刊にて帝展大改革の全貌發表あり 余

は廢官のまゝ引退することとなり後任は清水澄博士任せられたり

極秘裏に作成された改革案は五月二十八日の定例閣議に上程され、一気に可決された。翌二十九日には各紙がこの抜き打ち的改革について大々的に報道したが、その一つ、『読売新聞』は次のように報じた。

各派から十九名參加

『帝國美術院』改革成る

院長には清水樞密顧問官

生れ出た學國的機關

積年の情弊を打破するわが國美術界空前の大改革、文部當局の統制下に『堅實なる指導精神を樹て、日本美術の眞價を發揮』するいはゆる學國一致、強力なる綜合美術團體の結成は既報の如くひろくオール日本の朝野巨匠、泰斗を網羅して更新したる『帝國美術院』が組織され、廿八日の閣議決定事項としてその官制が公布された。正木院長の勇退によつて何人が新院長に推されるか關係各方面的注目を浴びてゐたが、意外にも現樞密顧問官法學博士清水澄氏が就任した、これは文部當局の時流を反映した統制方針を如實に物語る人選であるが新會員は從來の卅名を五十名に増員して舊會員の全部を任命したほか舊師竹内栖鳳氏との感情問題から從來たゞの一度も會員に推薦されたことのなかつた橋本關雪氏が特に加へられ、さらに舊帝展と堂々對立をつづけてきた院展派からは總帥横山大觀氏はじめ安田靫彦、富田溪仙、前田青邨、小林古徑、佐藤朝山、平櫛田中氏ら、藤井浩祐氏をのぞく幹部全部を迎へた、二科會からは御大石井柏亭氏以下山下新太郎、安井曾太郎、藤川勇造、有島生馬の五氏、國畫會からは總帥梅原龍三郎氏と工藝の富本憲吉氏、春陽會からは小杉未醒氏、青龍社の川端龍子氏、構造社の齋藤素巖氏、朝倉塾の朝倉文夫氏と在野巨匠十九氏をあつめた、定員五十名のうち残された一名は各部との均衡上工藝方面から選ばれるものとみられてゐる、院展彫塑の泰斗藤井浩祐氏が銜衝洩れとなつたのは意外とされてゐるが大體において文部省の期する學國一致的顔ぶれは揃つたわけである

民間展覽會は束縛せぬ

帝展は二組に分ち隔年開催

來月十日新官制のもとに第一回會合が開かれて審査員、無鑑査、展覽會開催の規程等重要詳細な規程を協議する筈であるが展覽會は秋一回、一部と四部、二部と三部の二組にわけ隔年開催することになり、審査員は三部、四部の如く會員少數の部は例外とし全部會員中から互選或ひは院長指名によつて決定、とかく禍根を胎す無鑑査問題は極度にこれを制限したうへ華族制度の如く無鑑査取消しも行ひ得ることになる模様である、こゝに問題となるのは從來の院展はじめ民間美術諸團體の展覽會開催であるが文部當局としては新帝展の結成によつてこれら民間展覽會の統制までは行はず各團體の自由意志に委すこととなつた、しかし實際問題としては秋新帝展と同時に開催することは不可能であり、結局春一回開催といふことになるであらうが各團體の統率者の精力を大部分帝展に奪はれる結果從來の如き華々しき民間美術展は望まれな、結局民間諸團體に設けられてゐた『本展以外の展覽會に出品すべからず』といふ會員または同人に對する制限が除かれたといふわけである。

〔中略〕

〃更生〃の新陣容

〔中略〕(姓名の上に●印のあるのは新帝國美術院にはじめて會員となつた人、餘は舊帝國美術院會員)

帝國美術院長

樞密顧問官 清水 澄
法學博士

帝國美術院會員(イロハ順)〔傍線は本校教官——編者註〕

- (帝展) 板谷 波山
- (二科) 石井 柏亭
- (帝展) 橋本 關雪
- (帝展) 西村 五雲
- (帝展) 西山 翠嶂
- (院展) 富田 溪仙
- (國畫) 富本 憲吉
- (帝展) 岡田三郎助
- (帝展) 和田 英作
- (帝展) 和田 三造
- (帝展) 川合 玉堂
- (青龍) 川端 龍子
- (帝展) 川村 曼舟
- (帝展) 香取 秀真
- (帝展) 鏑木 清方
- (院展) 横山 大觀
- (帝展) 竹内 栖鳳
- (帝展) 建畠 大夢
- (帝展) 土田 麥僊
- (帝展) 内藤 伸
- (帝展) 中村 不折
- (帝展) 中澤 弘光
- (國畫) 梅原龍三郎
- (帝展) 山崎 朝雲
- (二科) 山下新太郎
- (院展) 安田 靱彦
- (二科) 安井曾太郎
- (院展) 前田 青邨
- (帝展) 松林 桂月
- (帝展) 松岡 映丘
- (二科) 藤川 勇造
- (帝展) 藤島 武二
- (院展) 小林 古徑
- (帝展) 小室 翠雲
- (春陽) 有島 生馬
- (帝展) 赤塚 自得
- (帝展) 荒木 十畝
- (朝倉) 朝倉 文夫
- (構造) 齋藤 素巖
- (院展) 佐藤 朝山
- (帝展) 清水六兵衛
- (帝展) 北村 西望
- (帝展) 菊池 契月
- (帝展) 結城 素明
- (帝展) 滿谷國四郎
- (帝展) 南 薰造

〔下略〕

改革断行に関する松田文相の見解も談話のかたちで同紙に掲載されており、改革の趣旨は、「思ふに國家の施設する帝國美術院はよく識見閑歴の卓越せる人材を網羅して權威ある舉國一致の指導機關となり、よつてもつてわが國美術全般の堅實なる發達を裨補しなればならぬ」という点にあったとされている。帝展は大正八年の開設より年を経て次第に情実の弊害が現われ、作品の質が低下して来たため、数年前から改革問題が議論されていた。したがって、今回の改革に於ける、在野団体の主腦を抜擢して帝國美術院会員に加え、新体制の下に真に權威ある帝展を開催しようという意図は妥当なものであった。しかし、改革案の検討が旧会員を除外して極く一部の者によって行われ、秘密裏に新会員推挙の交渉が進められ、また、旧帝展に於ける無鑑査級出品者の特權を解消しようという狙いも改革に盛り込まれていたもので、美術家たちに大きな衝撃を与え、大騒動を引き起こした。本校日本画科教授の結城素明も「全く寢耳に水でたゞ啞然とするのみだ」と不満の意を表し、同油画科教授藤島武二も「實に輕率至極な天下りの態度で甚だ心外である」と非難した。また、本校の油画科教官、卒業生には旧帝展無鑑査級の者が多かったが、六月三日には左記の記事が示すようにこの無鑑査級の人々が帝展不出品同盟を結成。その中には小林万吾、田辺至、伊原宇三郎のような現職教官も居り、改革当事者側の和田英作校長と対立する形勢となった。

新帝院混亂

洋畫無鑑査の大部分 遂に不出品同盟結成 『改革は暴舉』と痛撃 文部省狼狽して總會延期

既報、三日午後舊帝展洋畫部審査員、推薦の無鑑査組十六氏は改組された帝國美術院の機構を信頼せず帝院の經營する新展覽會には既得權の如何に關せず不出品を遂に聲明、新帝院と袂別絶縁の意志を明かにした、引きつゞき丸の内明治生命館地下室「マーブル」で協議を續けた上、夜に入つて會場を新橋花月に移し他の舊帝展洋畫部無鑑査級四十餘名〔マ〕(舊帝展洋畫部無鑑査は六十九名)と合流、十六氏側の聲明書の趣旨を説明、協力をはかつたところ、何れも今回の文部當局のクーデターを暴舉として憤慨してゐたところとて、直ちに賛成し

清水良雄、小寺健吉、跡見泰、耳野卯三郎、小磯良平、猪熊莖一郎、中西利雄、佐藤敬、北島淺一、三上知治、池部鈞、富田温一郎、新井莞、佐分眞、鈴木千久馬、橋本邦助、五味清吉、平岡權八郎、有馬さとえ、小林萬吾、石川寅治、金山平三、田邊至、柚木久太、太田三郎、大久保作次郎、寺内萬治郎、阿以田治修、中村研一、辻永、小絲源太郎、吉田苞、太田喜二郎、山下繁雄、緒方亮平、鬼頭鍋三郎、牧野虎雄、三田浩、金澤重治、桑重儀一、松村選、鈴木誠、有岡一郎、吉村芳松、佐竹徳次郎、高村眞夫、永地秀太、白瀧幾之助、三宅克己、奥瀨英三、加藤靜兒、赤松麟作、大野隆徳、安宅安五郎、權藤種男、相馬其一、香田勝太、矢島堅士、伊原宇三郎、小柴錦侍、北蓮藏、濱地清松(署名順)

の六十二氏が署名した決議をなし新帝院との絶縁を聲明、文部當局不信任の巨弾を放つと同時に美術界空前の大衆運動を起した、一方情報に接した文部當局は極度に狼狽して添田政務次官は午後四時半文相官邸に赤間専門學務局長、和田東京美術學校長を招き協議したが、何等まとまらず、單に來る十日開催豫定の新帝院會員總會を延期して切り崩し策に出ることになった、絶縁を聲明した舊帝展洋畫無鑑査の諸氏は今後新團體を形成、帝展に對し在野團體の地位を確保するものと見られる、なほ決議文は印刷して文部省はじめ美術關係各方面に配布するが、これによつて滿洲旅行中の熊岡美彦、高間惣七氏等の東光會の同人を除く舊帝展審査、無鑑査、特選級全部が不出品同盟を結んだこととなる

決議 今度の帝展改組は些々たる世俗の風評に動かされ、既に政府が認めたる一國の最高美術機關に何等の諮るところもなく、一朝にして美術振興に關する實績と歴史とを蹂躪した暴擧と思ひます、故に私達はかゝる信頼を置く能はざる組織の下に開催される展覽會には、今後一切私達の制作を出す品しないことに致します

〔下略〕

(昭和十年六月四日『東京日日新聞』)

不出品同盟の成立により、和田英作は非常に困難な立場に立たされることになった。彼は各方面からの攻撃の矢面に立ちながら、反対派の慰撫に奔走した。

嵐のような騒動の中で六月十四日、本校會議室に於いて帝國美術

院の總會が開かれ、次いで二十九日に学士院で再び總會が開かれ、さらに種々の協議が行われた結果、帝展の無鑑査資格者は帝國美術院會員、同参与、旧帝展に於ける受賞者、帝國美術院が指定した者の四種を含むものとし、展覽會は隔年交替制度(日本画と洋画は隔年にあるいは春と秋に分けて開催する。彫刻は和風彫刻と洋風彫刻に分けて同じく交替して開催する。工芸は毎年開催する。)によつて開くこととした。その第一回展は翌十一年春に開かれ、日本画、和風彫刻、工芸のみが出陳された。日本美術院の主要作家や川端龍子も出品したため、確かに帝展の面目は一新したが、同年六月の平生(夙三郎)文相による再改革により、展覽會が文部省主催に変更し、再び騒動が起つたため、改組帝展はこの一回限りで廃止され、松田文相、正木直彦、和田英作らの「挙国一致」の体制樹立構想は崩れ去った。

なお、松田改組は従来帝展に對抗して独自の立場を貫いて來た在野諸団体の内部に深刻な対立を引き起こし、脱退や追放などの事件が発生した。

⑨ 正木記念館設立と正木直彦寿像の寄贈

昭和十年十一月一日、前校長正木直彦を記念して建てられた正木記念館の開館式が挙行された。このことは校友会会報の記事(699頁参照)のとおりであるが、そのなかに記されている正木直彦の寿像は予定通り沼田一雅の手によって完成し、同十三年十月二十六日、正木の七十七歳の誕生日に除幕式と沼田一雅から正木へ、正木から正木記念館建設會へ、同會から國家への贈呈式が行われた。同月、